

## 書評

### 日中の架け橋たらんとする日本青年の溢れる情熱と呼びかけ

藤村建夫

ミャンマー日本・エコツーリズム会長  
(独) 国際協力機構客員専門員

加藤嘉一, 2011年, 「われ日本海の橋とならん: 内から見た中国、外から見た日本——そして世界」、ダイヤモンド社

私が最初に加藤嘉一という名前を知ったのは、NHK、BS テレビの「エルムンド」という番組で「今、中国で最も有名な日本人」と紹介されてゲスト出演した加藤氏を見た時である。年齢は 27 歳。私は全く知らない人だったので、興味を持って番組を見ていたところ、非常に驚かされた。高校卒業後、すぐに北京大学に留学した経緯と動機、大学生活、そして現在の活動状況等について、スラスラと明瞭に話す会話の巧みさ。論旨といい、言葉使いといい、何といても話の論点が極めて明瞭で、際立っていた。

弱冠 27 歳というのに何と 7 冊の本を出版し、その内 5 冊が中国語だという。英語と中国語がネイティブ並みに出来るので、Financial Times 中国語版コラムニスト、北京大学研究員、慶応大学 SFC 研究所上席所員、香港フェニックステレビコメンテーターという肩書で活動し、年間 300 以上の取材を受け、200 本以上のコラムを書くという。超人的な活躍である。そこで、翌日、本屋に行って買って読んだのが本書である。「友よ、国を開き、心を開け」と、同じ若い世代の日本人青年に呼び掛けている。溢れるような情熱が伝わってくる。夢を持たない多くの若者にぜひ、この本を読んでもらいたいものである。

著者の中国語の学習方法は、特に印象的である。著者は、高校卒業後、中国政府の奨学金をもらって北京大学に留学し、SARS で休校中の時間を使って、朝から晩まで、中国語学習につとめ、6 カ月間で中国語をマスターした。毎日、売店の女性販売員と 8 時間会話し、人民日報を毎日隅から隅まで読み、数多くの庶民や学生との対話を通じて中国語をモノにしたのだ。語学学習にお金をかけないというのもユニークである。また、たまたま北京大学を訪問した胡錦濤国家主席との出会いを通じて知りえた政府要人との人脈により、中国政府の政策や施策を知る稀に見る強いパイプを構築した。

本書を通じて著者が伝えたい 3 つのメッセージを以下に紹介したい。

#### 「日本人には中国の真の実情を理解してもらいたい」

彼は巧みな中国語を生かして、日常的に学生・民衆と議論し、政府要人と意見交換を行っている。彼の優れた分析力によって、現代中国の政治・社会構造の課題・問題点を 3 つの章で的確に摘出している：第一章「中国をめぐる 7 つの疑問」、第三章「日中関係を良くするために知って欲しいこと」、第四章「中国の民意はクラウドと公園にある」。そして、中国の未来を次のように予測

する。「もはや党指導部によるトップダウン型の統治はありえない。今後数年は、党指導部によるトップダウンと、民衆からのボトムアップが激しいつばぜり合いを続けるだろう。そして最終的には、ボトムアップの力が勝利を収めるはずだ。。。時代が動く「その時」がいつやってくるかは、誰にもわからない。。。僕は自分の頭の中だけに設定した「その時」のタイムスケジュールのもと、いまやるべきことを決めている。残された時間は、さほど多くはないのだ」と。(同書 32 頁)

#### 「日本人も中国人もお互いの優越感、劣等感を捨てて、理解を深めるべきである」

著者は小さい頃から日本に違和感を持ち、日本から脱出することを夢見て、「国際人」、「地球人」として活躍したいと願っていた。しかし、いざ北京で生活を始めてみると、日本人であるというだけで、罵声を浴びせられたり、入店を拒否されることに遭遇した。それから自問自答が始まり、日本人であること、日本を愛していることを自覚するようになった。そこから彼の発信のポイントが作られた。彼は発信する時に「ストライクゾーン」を外さないという信念を貫くことにした。それは、「自分は日本人であること」、「ここは中国であること」、「政府・インテリ層にとって価値ある提言であること」、「大衆に伝わること」という 4 項目が全て交わるゾーンをいう。「たとえ議論が日中のデリケートな政治問題に及んだ時でも、安易に謝罪したり、彼らと一緒に日本を非難したりすることはない。日本を代表する人間として最低限守るべきライン、日本人としての尊厳や自尊心は、常に意識している」と述べている。そして日本人に対しては、中国に対する優越感、劣等感も捨て、お互いの「違い」を乗り越えるべきと訴える。同様に、中国人に対しても同じメッセージを投げることを忘れない。「日中両国民の『心の壁』を取り除くことは自分の使命だ」と信じている。

#### 「日本の将来は危機的状況にあり、その改革・再生をオールジャパンで成し遂げるべきである」

著者は、日本の失われた 20 年といわれる「出口の見えないデフレ不況、萎縮、孤立、漂流、ジャパンパッシング、財政崩壊、少子高齢化、無政治状態、言い知れない閉塞感、そして、全く見えない政治のリーダーシップ」について、大きな危機感を抱いている。日本崩壊を 2030 年と予測し、東日本大震災で余命はさらに 10 年短くなったとして、これからの 10 年間に、再生を成し遂げなければ、危ういと予測する。

「3 年前、僕が教師をやっていた中国人民大学附属中学高等学校の一室で、中等部 1 年生の女の子が質問してきた。『加藤先生。ここ最近の国際会議では、日本の総理大臣だけが毎回違うことに気づいたんですけど、どうしてなんですか？理由を教えてくださいませんか？』僕にも教師としての面子があったから、選挙制度や国内外の情勢、教育や政局など、各方面から説明を試みたが、内心穏やかではなかった。放課後の帰り道、夜の公道を歩きながら涙が出てきた。悔しくてしようがなかった。。。日本はどうなって行くのだろう。表面の対応では問題は解決されない。時計の針は東日本の大震災で 10 年進んだのだ。国家戦略と国民のマインドセットをゼロから立て直す位の姿勢で取り組まないと、日本はどんどん世界から取り残されてしまうことは間違いない」と。(同書 186-187 頁)

そして、若い人たちに「海外に出よう」と、こう呼び掛けている。

「日本人はいつもチームワークで勝負してきた。個人の利益だけを追求するのではなく、みんな  
で立ち向かう文化を世界に先だって育んできたのは、ほかでもない僕たち日本人だ。いまこそオ  
ールジャパンで挑もうじゃないか。初心に戻ることはできない。でも、初心を忘れないでおこう。

若者よ、大局を視ろ！

若者よ、大志を抱け！

若者よ、大地を行け！

気合だ！

何度でも言わせてもらおう。

僕らの武器は気合、気合、そして気合なんだ！

流した汗は、決して嘘をつかない。」(同書 190 頁)

2030 年、日本の崩壊が来る前に、著者は日本の再生を強く願っている。そのために、オールジャ  
パンによる、大胆な再生のビジョンと実行を強く求めている。若い人たちに夢を与え、政治家に  
は、警鐘を与える好著である。

日中関係が、日米関係と同様にますます重要性を増しているこの時期に、中国政府要人と忌憚な  
く話し合える日本人が待望されている。著者はその数少ない人材として真の「日中の懸け橋」と  
なってくれるだろう。